

【講演 1】

認知言語学と日本語教育

— 応用認知言語学の可能性 —

森山 新

要 旨

言語習得に対する考え方は、時代と共に行動主義、生得主義、認知主義へと大きく変化してきたが、21世紀を迎え、認知主義は応用認知言語学を提示し、英語教育の分野において言語習得や言語教育に有益な示唆を与え始めている。日本語教育においても、森山（2005、2006）をはじめとして、徐々にそうした取り組みが始まっている。

【キーワード】

行動主義 生得主義 認知主義 応用認知言語学 日本語教育

1. 言語習得に関する3つのアプローチ

言語習得に対する考え方は、時代と共に大きく変化してきたが、大きく分けると以下の3つの時代に分けることができる。

- ①行動主義の時代（1960年以前）
- ②生得主義の時代（1960年以降）
- ③認知主義の時代（1980年以降）

1.1. 行動主義の時代

この時代は、言語学ではアメリカ構造主義言語学が、心理学では行動主義心理学が支配的な時代であった。行動主義の考え方は言語習得観にも影響を及ぼし、言語習得とは「刺激－反応の習慣形成」のプロセスであると考えられ、言語習得において教師の役割が重視され、教授法の研究が進んだ。この時代はオーディオリンガル・メソッドが全盛の時代であるが、これは教師がより良質の刺激をいかに豊富に与えるかが重要であるという行動主義的言語習得観が反映したものである。またこの時代には、第二言語教育に生かす目的から対照分析が盛んに行われた時代である。これは第二言語習得とは母語の古い習慣を退け、第二言語の新しい習慣を身につけるプロセスであるという行動主義的な考えによるものであり、母語と第二言語が異なる部分は古い習慣が新しい習慣形成の妨げになり、その結果第二言語の習得を阻害するが、両者が一致する部分はそのようなことがないため習得が容易となるとの考えから、母語と第二言語の異同を研究する対照分析が重要であると考えられたことによる（対照分析仮説）。

1.2. 生得主義の時代

ところがチョムスキー（Chomsky）が現れ、行動主義的な言語習得観は痛烈な批判を受ける。彼は「刺激の貧困性」という考え方をもって、言語習得において

重要なのは刺激といった環境要因ではなく、生得的言語能力であると主張して、生成文法という考え方を提示した。その結果研究の関心は、人間が生得的に持って生まれる言語能力がどのようなものであるかを解明することに向けられることになる。また生成文法の考え方は、言語能力を重視するあまり言語運用が軽視されたり、普遍性が重視される一方で母語の影響などの個別性が軽視されたり、生得的言語能力（普遍文法）が統率するのは統語規則であるという考え方から、統語論（文法）が重視され、意味論（語彙）が軽視されるなどの結果を生み出した。

しかしこのように環境要因から学習者の生得的能力へと関心が移行することにより、教師中心の視点から学習者中心の視点へ、教授法研究から習得研究へとといった変化が生まれ、第二言語習得研究が本格化していく。

1.3. 認知主義の時代

1980年代になると、このような言語習得観に変化が生まれ、言語習得を認知能力全般からとらえるようになっていく。

Pica（1983）は教室環境、自然環境、そして両者の混合環境という3つの学習環境における第二言語習得を調べ、環境要因が習得に影響を及ぼすこと、習得のプロセスには類似点（普遍性）もあるが相違点（個別性）もあることが示された。

またピーネマン（Pienemann）は言語習得を認知処理のプロセスとしてとらえ、「多次元モデル」、「Processability 理論」などを提示していく。さらに1960年代に生成文法のグループの中で意味論を重視し、「生成意味論」を唱えたグループが認知言語学とともに再登場したのもこの時期である。この時代は言

語習得のプロセスを、普遍性だけではなく、その個別性にも目をむけ、人間の認知処理のプロセスとしてとらえ、広く認知能力との関わりから説明しようとしている点が生得主義の時代と大きく異なっている。

生得的アプローチ（生成文法）と認知的アプローチ（認知言語学）とを比較すると、様々な点で大きく異なっているが、それを要約すると図1のようになる。

図1 生得的アプローチと認知的アプローチとの比較

	生得主義	認知主義
知識獲得の見方	合理論的 (Nature)	経験論的 (Nurture)
实在論	客観的实在論	経験的实在論
カテゴリー観	古典的カテゴリー	プロトタイプカテゴリー
研究対象	言語能力 (UG)	言語能力+言語運用
認知能力との関係	自律的・モジュール的	連続的・一体不可分
言語能力	トップダウン 極小主義・還元主義	ボトムアップ 極大主義・非還元主義
言語の意味	辞書の意味 (意味論)	百科事典の意味 (意味論~語用論)
言語の本質	統語論	意味論 (形式-意味)

生得主義は合理論的で、言語習得において生得的な言語能力が重要であると考え、これに対して認知主義は経験論的で、認知能力などの生得性は否定しないが、最初から生得的な装置などを前提とすることせず、言語習得において重要なのは、環境要因であり、環境から与えられた具体的な事例をもとに、認知能力を用いて言語知識を抽出していく点を重視する。したがって生得主義の考える言語習得とはトップダウンのプロセスであり、生得的な言語能力である「普遍文法」が特定言語（母語）のインプットを引き金に徐々に「個別文法」化していくと考える。これに対し、認知主義の考える言語習得とはボトムアップのプロセスであり、子供が言語の具体事例に触れながら、その共通性を抽出して文法規則（正確には「スキーマ」）を習得していくと考える。例えば、二重目的語構文の習得を例に挙げれば、生得主義では英語の具体的なインプットを引き金に、生得的な普遍文法から二重目的語構文「N (AG) +V+N (POSSR) +N (MVR)」が導き出され、そこから Give me milk. といった具体的文が生成されていくと考える（しかしその途中のプロセスについて、具体的な言及に成功したものはいない。Tomasello 2003）。これに対し、認知主義では、まず子供は Gimme milk. などの具体事例に触れ、それが繰り返される中で、「Gimme milk. → Gimme X (thing)」と

徐々にスキーマ化が進み、項の意味役割も徐々に抽象化して、最終的に「N (AG) +V+N (POSSR) +N (MVR)」というような抽象度の高いスキーマ（文法）が抽出されると考える。最近トマセロ (Tomasello) は第一言語習得の一連の実証的研究の中で、そのボトムアップのプロセスを明らかにし、「動詞の島仮説」を提示している。

2. 応用認知言語学の時代

認知言語学が提案する言語習得モデルは「使用基盤モデル (Usage-based Model)」と言われるが、トマセロの研究は母語習得においてその正当性を実証的に示し、「使用基盤言語学 (Usage-based Linguistics)」という用語を用いている。このような動きは 21 世紀に入り加速化し、応用認知言語学という新たな学問分野へと発展している。2000 年には『Cognitive Linguistics』11 (国際認知言語学会) で、言語習得の特集が生まれ、2001 年には『Cognitive Linguistics Research』19 で「応用認知言語学」をテーマに言語習得理論や教授法が論じられた。

このように英語教育において開始された言語習得・言語教育研究であるが、日本語教育においても、徐々にそうした取り組みが始まっている。森山 (2005) は認知言語学の観点を生かして日本語の格助詞の意味構造を分析した上で、習得過程との関係を明らかにし、日本語教育への応用を試みている。また森山 (2006) では、これらの研究をもとに「認知言語学が第二言語教育へ提言すること」を以下の 7 項目にまとめている。

- (1) ボトムアップのプロセスの重視
- (2) 言語運用重視
- (3) 意味のカテゴリー構造の明示
- (4) 言語学習の語彙学習的側面の重視
- (5) 認知能力の発達に対する配慮
- (6) 百科事典的な背景知識の重視
- (7) 言語の類型論的特徴の重視

これらの提案にはまだ実証的に検証されたとはいえないものもあるが、これまでの応用認知言語学の成果を基盤に提案されたものである。今後これらの一つ一つについて実証的な検証が行われ、日本語教育へ何らかの貢献ができるものと期待される。

参考文献

森山新(2005)「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」(科学研究費基盤研究 (C) (2)課題番号 14510615 研究代表者: 森山新)

<<http://jssl.i.ocha.ac.jp/morishin1003/kaken.pdf>>からダウンロード可能

森山新(2006)「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書」(科学研究費基盤研究(C)課題番号17520253 研究代表者:森山新)

<<http://jssl.i.ocha.ac.jp/morishin1003/1st.pdf>>からダウンロード可能

Pica, T. (1983) Adult acquisition of English as a second language acquisition under different conditions of expose. *Language Learning*, 33(4), 465-497.

Tomasello, M. (2003) *Constructing a language: a usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press.

もりやま しん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻・助教授
moriyama.shin@ocha.ac.jp